



巻頭言

「情報」とは情けに報いること

武田薬品工業株式会社 常務取締役
アグロ事業部長 森本 至郎

昨年暮れ、「植調」の巻頭言を書く様にとの御依頼があった。此の時期、最も劇的な改革が東欧で進行しつつあった。

クレムリンに発した改革の嵐は東欧を吹き荒れ、最後迄抵抗したルーマニアのチャウシェスク独裁政権をも呑み込んでしまったのである。

技術革新の波は、コンピューターの発達によりコミュニケーションにも大きな変革をもたらした。電報、電話、ラジオ、テレビ、更にはファクシミリ、パソコン通信といったニューメディアの発達による「情報化時代」のめざましい進展は、世界をますます一体化させ、政治、思想の枠組みを越えてしまった。

鉄の障壁をも打ち砕いたのである。

昨年11月9日、東ドイツ政府は国境を開放し、国民の出国を自由にした。28年間に亘って東西ドイツを分断していた「ベルリンの壁」が消え、壁が遮った長い年月を噴出するように、数多くの東ベルリン市民が西ベルリンに雪崩れ込んだ。そこで東ベルリン市民が先を競ってまず手に入れたものは、肉や果物などの食料品ではなく、西ベルリンの新聞、雑誌類であったと報じられている。

東ベルリン市民は自由な、正しい「情報」に飢えていたのである。「情報」の力は偉大である。

翻って、今や我が国は「情報」が溢れており、「情報過多」「情報洪水」などと叫ばれて久しく、氾濫している「情報」に対して「情報と如何につき合うか」「情報整理学」などの単行本まで刊行されている。

また、最近の政府の世論調査によると、国民の8割近くが「現代は情報化社会であると思う」

と答えているとの報告がある。

しかし、そもそも「情報」とは何であろうか。わが国での「情報」という言葉の使われ方は大きく二つに分けられると思う。

その一つは「人から人への知らせ」といった意味で用いられるものであり、もう一つはコンピューターなどでの「信号」を「情報」としてとらえる使われ方である。

「情報」といい「情報社会」といい、そのとらえ方で大切なことは、人が中心であって、その人にとって役に立つ「知らせ」が正確に、速く、沢山届くことが必要なのであり、それが成熟した「情報化社会」である。

「正しい情報」は大切であるが、「誤れる情報」は人を惑わし、世を欺くものである。

人にとって、生身の人間が発する雰囲気やナマの言葉、表情をダイレクトに自分で受け止め、それから得られる「情報」が「最高の情報」であることを強調したい。

現在は人の健康管理面でも情報化が進んでいる。検査、検査で自分の身体の数値が情報として算出され、それを把握することもそれなりに意味があり大切なことであろうが、それよりも医師が親切に診断し、納得ゆくまで健康状態を懇切、丁寧に説明していただく方がどれだけ有難いことか。

こうした人と人との触れ合い、交流、コミュニケーションの中核になるものが、本来の「情報」であり、「情報」とは「人と人との心のつながりの産物である」と言いたい。

「情報」とは読んで字の如く「情けに報いる」ことなのである。